

東京湾でキチヌが増加

クロダイによく似た魚で、キチヌという魚がいます（図1）。尾鰭や尻鰭が黄色いので一般には“キビレ”と呼ばれています。大きくなると全長50cmほどになり、主に南日本に生息しますが、温暖化に伴って分布域を北に広げつつあるようです。東京湾奥では近年、チニングと呼ばれるクロダイ釣りがブームですが、かつては少なかったキチヌが釣れているという話を頻繁に耳にするようになってきました。当協会が羽田空港周辺と三枚洲周辺で実施している延縄や刺網による調査でも、平成19年度には見られなかったキチヌが令和3年度には52尾が採捕されており、近年は増加傾向が見られます（図2）。



図1 キチヌ

（令和6年8月26日羽田沖で採捕）

魚が増えて喜ばしいことのように思えるかもしれませんが、そうとばかりは言えません。キチヌは、クロダイと同様に甲殻類、貝類、海藻、小魚など幅広い食性を示す雑食性で、立派な臼歯を持ち、硬い貝の殻も砕いて食べてしまいます。アサリ放流の直後には、魚類の捕食が原因と思われるアサリのかみ砕かれた殻が多数確認され、アカエイと並んでこのキチヌも大きな被害を与えている可能性があります。また、当協会が実施しているアマモ移植の調査区では、11月15日の潜水調査でキチヌが餌を探索するような様子が動画に記録されました（図3 [動画へのリンク](#)）。アマモにはしばしば何者かに食いちぎられたような跡が見られます。今のところ確かな証拠はありませんが雑食性のキチヌもアマモに被害を与えているのかもしれません。

我々の調査に様々な影響を与えている可能性のあるキチヌ。今後も注目していきたいと思います。

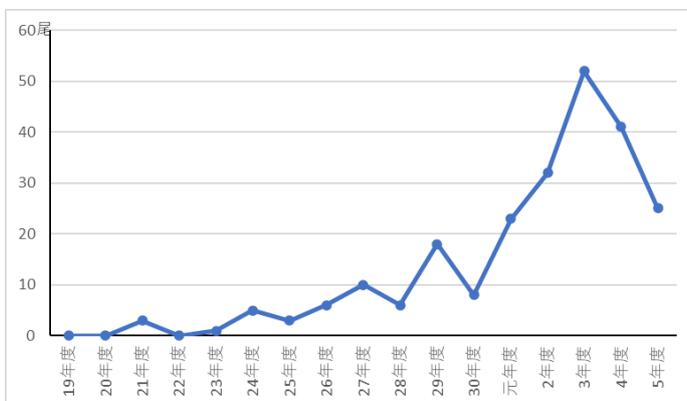


図2 キチヌの採捕数の推移



図3 アマモの移植区域で確認されたキチヌ